

ユカギール族の靈魂観（上）

齋藤達次郎

1 問題の所在

シベリアのコルマ河流域に住むユカギール族はサモエドやエスキモーと共に環極北文化の古代基層文化を担っている民族である。従ってこの民族の物質文化や再構成された意味での精神文化を明らかにすることはこのシベリアの地方の古代基層文化やひいては全シベリヤの文化にとって大きな意義を持っている。ユカギール族は大別して二つの大きな群に別かれ、一つはコルマ河畔のユカギール族で主に漁撈・狩猟民であり、もう一つはツンドラ・ユカギール族で馴鹿牧畜民である。彼らは元来はタイガの狩猟・漁撈民に属し、後になって主としてツングース族からトナカイ飼養の技術を導入した。つまりユカギールの古層文化は主としてコルマ・ユカギールに見られる。¹⁾

ところでユカギールの文化を研究するに当たっての困難性は資料の乏しい事にある。つまりヨヘルソンの行なった調査報告一極めて優れているが—が殆んど唯一の信頼出来る資料である。

この論文ではユカギールの靈魂観念とその民族学的解明（周辺民族との比較）、ユカギールの宗教における靈魂観念の占める位置などにつき考察することにする。

2 ユカギールの土地と人²⁾

上述の様に領土的に云うとユカギール族は二つの部分に分かれる。その一部はコルマ、コルダニ、バルキチャンとヤサチャナの支流沿いにおよびアハガ・タスの山麓に居住する。行政的には、この領土はマダガンスカヤ・オブラスチ(地区)、スレトヌイ・カンスキ・ライオン(県)、とヤクート自治

共和国のペエルクネ・コルミスキ・ライオン(県)に属している。ユカギール族のもう一つの部分はチユクチ河の盆地にある，コリュマとアラゼイヤの下流の森林地帯に住む。その他ニズナヤ・コルミスキ，アルカイコフスキ，ラスチャンスキ（いずれもヤクート自治共和国の県）にも見られる。そこでは殆んどエベンと同化してしまっている。

今日ではユカギール族は彼らの居住区域内で，一つの民族的単位を構成していない。上流コルマのユカギール族はヤクート族と混り合って住んでいる。ツンドラ・ユカギール族はエベン族，チュクチ族，ヤクート族，ロシア人と一緒に生活している。

18世紀から19世紀の数多くの文献はユカギール族が激減したことを教えている。1859年には彼ら数は2350人に減少した。1897年には1500人と推定される。20世紀の初頭になっても彼らの人口は減少し続けたが1924年になると始めて増大し始めた。ユカギール族の人口減少は彼等の隣接民族，エベンとヤクートの同化に由来する。

ユカギール語はいわゆるパレオ・アジア語族に属し，そこでは特殊な地位を占めている。ユカギール語は多数の方言を持っている。上流コルマ・ユカギールはツンドラ・ユカギール語を解さなかったが，今日では両グループはバイ・リングルとなっている。上流コルマ・ユカギールは彼らの言語の他にヤクート語を話す。ツンドラ・ユカギールはエベン語，あるいはチユクチ語，ヤクート語を話す。多くのユカギールはロシア語を知っている。

ユカギールという名称はヤクート語からロシア語によって借用された。しかしその起源は多分ツングース語に由来するがその意味ははっきりしない。ツンドラ・ユカギールは自称「オドウル」と称し，「強い」とか「力強い」という意味である。その他のユカギールは彼らの氏族名称によって自称の名前を持っている。

3 経 済 生 活

初期の文献の記述によるとユカギールは狩猟民ないし湖や河の漁撈民だ。

った。トナカイ飼養は17世紀になって知る様になったが、それはツングース族から借用したものである。最も重要な経済的な活動は野生のトナカイ狩猟であった。上流コルマ・ユカギール族は馴鹿の道に合せ弓を設けた。他の方法一貫も使用された。彼らは又デユイ・鹿を使って野生の馴鹿を狩猟した。狩猟の際は弓矢を使用した。18世紀末になると、彼らは火燧石鉄砲を使用し始めた。ツンドラ・ユカギールは「水浴している」野生鹿を狩猟した。春になると、野生の馴鹿は大きな群をなして北方の極北海へと移動した。夏と秋の終りには、彼等は南の森林に向った。春と秋の季節的な馴鹿の横断の間、ユカギール族は集団狩猟を組織した。馴鹿の群が水に入るとボートに乗ってトナカイを待っていた狩人達は馴鹿を囲んで殺戮した。この様な狩猟は19世紀の中葉には段々少なくなっていた。

4 社会関係

ヨヘルソンによると19世紀の上流コルマ・ユカギール族はエベンのクランとの混交から成っていた。その社会単位は野営又は村落内で数家族——時には親近関係の無い——から成り立っている。狩猟者の狩物は全住民に平等に配分された。唯毛皮だけが附加物的な獲物として、動物を殺した人の手に渡って。漁撈に関してはこの集団的な要素はずっと少なくなり、各家族はそれに割り当てられた地域で漁獲を行なう。

氏族内婚や母方居住、父系財産継承、婚前の性的自由などに関する民族学者の諸見解はこの民族が既に彼の民族と混交してしまっている為解釈が難しくなっている。

5 ユカギールの靈魂観念

(1) ヨヘルソンの記述³⁾

(a) コルマ・ユカギール族の靈魂観

三つの靈魂 (a'ibi) がある。その一つは頭の中に、もう一つは心臓に、第3番目のは身体全体に充満している。頭の靈 (a'ibi) が影の王国 (aijibi) に出向くと、あるいは悪靈が体内に入った為、地下の世界に逃がれた場合、

人は病気になる。この様な場合その結果死が訪れるのではなく、シャマンが影の世界へ降りて行って靈魂を呼び戻す。生命にとって重要な靈魂は二番目の靈「心臓靈」である。第三の靈魂は大地に影を投げる。死者は影が無い。人が死ぬと頭の靈魂は影の王国へ出向くが、他の二つの靈魂がどうなるかについてはトルイヤ（ユカギールの古老）は何とも云えなかった。古代のシャマンは何でも知っているが近代のシャマンは知らない。生きているものは皆、三つの靈を持っている。外見上靈魂はその所有者に似ているが唯それは普通の人間には見えず、形も小さい。静止しているものも靈魂があるが、唯一つあるにすぎない。生命あるものの活動は心臓アビイ（靈魂）に依存している。チュボジェという単語は「走行」と「動作」のみならず「心臓」を意味している。

ヨヘルソンの考えによるとこれらの靈魂は次の様に要約される。「この三つの靈魂にいての考えから、引き出せる結論は頭の靈魂は知力を現わし、心臓靈は動作を支どり、即ち彼らの地位を変える生者の能力、それに対し第三の靈魂は肉体的な機能を支どっている。」

(b) ツンドラ・ユカギールの靈魂観

第一の靈魂は nu'nnin と呼ばれる。これは nu'nniji すなわち靈魂の国と呼ばれる影の王国、あるいは yo'bunru'-kyn-burunhe 「死者の住居」と云う影の王国へ旅する靈魂である。第二の靈魂は e'heren と呼ばれ、死後天へ行く。第三は物質の主で、O'no と称し、地上に止まるか、天へ行くかである。ツンドラ地区での e'heren は「氣息」を意味することが注目される。

(2) 異なる二つの見解

(a) シュミットの見解⁴⁾

シュミットは頭の靈魂を映像靈、心臓靈を氣息靈、肢体靈は影の靈であると考えた。死後のこれらの靈魂の行末について、第一の靈は西方の下界へ行き、第二の靈は天へ、第三の靈は東方に住む父の神の方へ、第三の靈は恐らく地上に止まっているらしいと述べている。そこで、頭の靈魂は多分母権的農耕文化に帰属し、それを恐らくチュクチ族から借用したのだと

考えた。心臓靈は多分原文化(狩猟, 採集文化)と牧畜民文化に由来し, 肢体靈はトテミズム的な高度な狩猟民文化から派生したものだと考えた。ユカギール族はヤクート族と隣接しているが, ヤクート族の靈魂観念からの影響は見られぬと主張した。

(b) パウルソンの見解⁵⁾

パウルソンは頭の靈魂を自由魂, 心臓靈を生命靈, 肢体靈を身体靈と考えた。そしてこの自由魂とその他の靈を身体靈と二分して考え, こういった二元的多数観の観念がシベリアの多数の民族に見られると考えている。すなわち,

「心臓の靈魂と恐らくは肢体靈魂も身体魂であることは疑う余地がなからう。とりわけ心臓靈は生命にとり重大であり, 生物の活動性の前提となっているのは, 心臓に局在している生々とした靈魂であり, 人間や動物の肉体生活の担い手としての生命靈, つまり万事を動かしているのだ。心臓靈は心臓に住み家を持ってはいるが, この器管とは同一とは考えられておらず, そのことは「心臓」と「心臓靈」という二つの違った名称にも表われている。

身体全体に充満し, かつ身体における肉体的機能を支どっている肢体靈はヨヘルソンも強調している様に一つの生き生きとした身体魂, すなわち, もうひとつの別の形の生命靈である。地上に影を投げるという意味は人間の身体が影を与えるということで, これはつまり身体全体に生命が充満していることと同じ意である。」

6 概 括

シュミットとパウルソンは同じ資料から大体同じ様な基本的分類を示しこの点では両者は共通点を持っている。しかしシュミットは文化圏と結びついた歴史的な解釈を示している。それに対しパウルソンはむしろ現象学的, 構造的関心からこの靈魂観を二元的靈魂観として解釈し, これをシベリア全体の諸民族を説明する原理の一つとしている。しかし両者の違いは決して関心の違いだけとは云えず, 次の様な疑問点に到達する。一体経済

形態が違ってパウルソンの云う様なシベリア全体を説明する様な靈魂分類の原理が存在するのかという点、第二にシュミットの云う様にユカギール族の靈魂観念が他の民族文化に由来する合成物として解されるかという点である。この問題については次の論文で論及したい。

〔注〕

- 1) ドルギフ, ファインベルグ : 「サモエド文化およびエスキモー文化における若干の類似の特徴」(河野本道訳, 北アジア民族学論集第3集, 1966)
Levin, M. G. *Ethnic Origins of the Peoples of Northeastern Asia.* pp. 140—144 1963, Canada
- 2) Levin, M. G. & Potapov, L. P. : *The Peoples of Siberia*, pp. 788—798. 1964, Chicago.
Schmidt, W. : *Der Ursprung der Gottesidee, X, Die Religionen der asiatischen Hirtenvölker.* pp. 677—758, 1952 Münster in Westfalen.
- 3) Jochelson, W. : *The Yukagir and the Yukagirized Tungus*, MAMNH. (JNPE) 9. 1926
- 4) Schmidt, W. : *do* pp. 677—758
- 5) Paulson, I. : *Die primitiven Seelenvorstellungen der nord-eurasischen Völker.* pp. 174—182, 1958, Stockholm.

パウルソンによると、ユカギール、チュクチ、ツングースの靈魂観は自由魂—生命魂から成り立っているのに対し、エベン、ヤクート、南ツングースでは、自由魂—自然魂—生命魂といった構造を持っている。